

環境教育の現場から <最終回>

本シリーズでは環境教育を実践している組織やNPO等を訪問して、それぞれの環境教育に対する取り組み状況を知るとともに、環境教育の対象者が理解を深める仕組みや工夫を学んだ。本シリーズで取り上げた組織や団体の特徴や、それぞれが工夫している点を下表にまとめた。

知識から行動へ

『環境教育の効果とは、子どもたちが自分たちの将来に対して絶望的になることである』という皮肉な見方もある。これは、知れば知るほど環境問題を解決する難しさがわかってくる、ということでもあるが、だからこそ知識の習得にとどまらずに気づきを行動に変えることが大切である。

そのためには、対象者が一度きりのイベントに参加するだけでなく、リピーターとして繰り返してプログラムに参加するようなしくみが必要である。谷津干潟自然観察センターで実施しているような「ジュニアレンジャーシステム」が一つの好事例である。

また、得た知識や技術を活かして、環境問題の解決につながることを実行することも大切で、そのためには身近な問題からはじめるのが有効な方法であり、グラウンドワーク三島で行っているような地域密着型の活動が重要な示唆を与えてくれる。

活動の持続性

環境教育の成果は一朝一夕に得られるものではなく、そのためにも継続的な活動が必要である。組織運営を持続的に進めていくために、ホールアース自然学校はエコツアーのガイド料収入等によって

いる。またキープ協会もさまざまな有料プログラムや宿泊を伴う体験プログラム等を実施している。さらにグラウンドワーク三島の場合は、その地域にすむ住民が活動に主体的に関わることで持続性を担保している。

インタープリターの役割とプログラム・デザイン

環境教育は「関係性教育」ともいわれる。「人と人」、「人と自然」との関係が重要であり、インタープリターはその関係性を作り上げていく仕事でもある。したがって、インタープリターの資質がプログラムの出来に密接に影響する。さらにインタープリターに加えて、プログラム・デザインもまた重要である。プログラム全体を紡ぐ意図や伝えたいねらいに沿って、プログラムの構造や流れを編集することが、より良いプログラムの実施につながる。

環境教育の課題と今後の展開

環境問題はヒトという種の生存の問題にも関わる深刻な課題であり、その根本的な解決策の一つとして、環境教育への期待や重要性の認識も深まっている。しかし、問題は複合的であり、さまざまな要素が相互に関連して拡大していて、決定的な問題解決に至る展開が見られないのが現実である。その責務を環境教育だけに押し付けたり、一般市民の行動だけに期待することはできないが、人間が作った社会や地域の問題は、人間が解決していかなければならない。そのためには今後とも「人作り」が重要であり、さまざまな環境教育プログラム実施を通じた人材育成が求められている。

組織・団体の名称	主な特徴	工夫していること
谷津干潟自然観察センター	都市化の進む中で都会に残された貴重な干潟を守るビジターセンターで、そこに飛来する鳥を中心とした観察・学習センター。	<ul style="list-style-type: none"> ▶ ステップ式の「ジュニアレンジャー・システム」によるリピーターの確保 ▶ 市民がボランティアとしてセンターの活動に参加
ホールアース自然学校	富士山麓という立地を生かしたエコツアーや、「人・自然・地域の共生する暮らし」を実践するプログラムの提供。	<ul style="list-style-type: none"> ▶ ガイド料収入等を組織運営の基盤として活動の持続性を図る ▶ インタープリター（ガイド）が質の高い内容のエコツアーを提供することが収益の確保につながる
グラウンドワーク三島	市民、NPO、企業、行政とのパートナーシップをコーディネートして、「水の都・三島」の水辺自然環境の再生と改善を行う。“Think globally, Act locally”の地域密着型の活動。	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 住民や企業が積極的に参加して、自らの環境や社会をより豊かにすることを目的とする ▶ 「眼に見える」日常的な活動が、学校における環境教育と連携することで、「気づきを行動に変える」
キープ協会	八ヶ岳自然ふれあいセンターの管理運営、自然体験プログラムの実施、環境教育指導者の育成等。日本における環境教育の草分け的存在。	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 企業や学校向けの“オーダーメイド”型プログラムの実施 ▶ 知識の伝達よりも、参加者の心にメッセージを届けることがインタープリターの重要な役割